
新・男の料理教室

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

新・男の料理教室

【コード】

N01111C

【作者名】

【あらすじ】

男の料理番組「一文字岩鉄のクッキングエルボー」撮影開始。今回は野外ロケで大自然。

第1話：滝へ

木々と茂る緑の隙間から差し込む光が、エプロン姿の若い女性をやさしく照らす。

「皆さんこんにちは。今回の一文字岩鉄先生のクッキングエルボーは、ご覧のとおり野外ロケです」

河原のデコボコした石に苦戦しながらテレビカメラは若い女性をとらえる。

「あの大きな滝をご覧下さい、岩鉄先生はあの滝の上にいらっしやいます。先生、聞こえますか？」

カメラが切り替わり、滝の上を映し出す。水がはるか下に落ちる時の体に響く重い音と共に、禪姿の男が映し出された。

角刈りに鉢巻、鍛え上げられた肉体には大小無数の傷が刻まれている。特に、左肩から鳩尾を通りわき腹にまで続く大きな傷が目立つ。

「先生、胸の傷がすごいですね。やはり修行の際に出来たのですか？」

「うむ、これは以前、自力で盲腸の手術を」

「なんと本日は岩鉄先生が滝に飛び込むそうです。先生、これも修行の一環なのでしょうか？」

「切ったはいいが盲腸が見つからなくてな、そうこうしている内に「ご覧下さいこの滝！ 自然という物の力をまざまざと見せ付けてくれています」

滝から絶え間なく水が流れ落ち、滝壺にしぶきを上げる景色が映し出される。荘厳ともいえる光景が広がっていた。

「それでは先生、そろそろお願いします」

「うむ」

男は胸の前で手を合わせて目を閉じた。人の音が消え、水の音が辺りを支配する。

ゆつくりと男が目を開く。心身ともに気合が充実し、その目には微塵の迷いもない。

「はっ！」

気合の声と共に男は足場の岩盤を蹴り、体を宙に躍らせた。手をまっすぐに伸ばし、頭を下にして滝の水と共に落下していく。

そのまま男は滝壺の水しぶきの中へと消えていった。

「先生が飛び込みました！ 大丈夫でしょうか」

若い女性は川面をただ見つめている。

滝の水は途絶える事無く、滝壺に向かって流れて落ちる。

滝から離れた水は川の流れとなり海へと向けて遙かな旅にでる。

一部は大地に潜って遠回り。一部は大気に昇って運任せ。

流れは常にうつろい、全体では一つにまとまり同じ場所を目指す。

それは昔から変わらず、そしてこれからも変わらない。

川面は移り変わりつつ、何事もなく、流れていく。

「それではまた来週」

第2話：空へ

川面に反射した日の光が、エプロン姿の若い女性を照らす。

「皆さんこんにちは。一文字岩鉄先生のクッキングエルボーは今回も野外ロケです」

河原に設置された特設キッチンに向こうにいる若い女性を、テレビカメラが画面にとらえる。

「それでは登場していただきましょう！ 先週入院して、峠を رفتり来たりしていた一文字岩鉄先生です！」

カメラが若い女性の隣にレンズを向ける。そこには青白い顔をした男が沈んだ雰囲気をもとわけて立っていた。

「先生、顔色が悪いようですが大丈夫ですか？」

「……うむ……少々調子が悪いが……気合で何とかなる」

「先生、無理はなさらないで下さいね」

男はゆらゆらとふらつきながら、川の方を見ていた。

「……うむ……いい川だ……向こうの花畑は……きれいな物だな」

「？」

男の見ている方向には、石の転がった河原が広がっているのみ。

若い女性が目を凝らして男を見ると、体の向こうの景色がつつすらと透けて見えた。

「それで先生、今日のメニューはなんでしょうか」

「……呼んでいる……行かなくては」

男はふらふらと川へと向かって歩き出した。若い女性は、キッチンの調味料入れから塩を一掴みすると、男の背中に投げつけた。

「ぐおっ！」

塩がかかった男の背中から蒸気のような物がたちあがる。

「先生、しっかりしてください」

「う、うむ。何か夢を見ていたような……」

男は目をぱちくりさせていたが、自分の頬を両手で叩いて気合を

入れた。

「それで先生、今日のメニューはなんですか？」

「うむ、今日は近くに川があるので、魚でいきたいと思う」

「それはいいですね。では先生、よろしくお願いします」

「うむ、それではまず魚を捕まえよう」

男は背中から蒸気を吹き上げながら川へと向かって歩き出す。最初はしっかりと足取りだったが、次第にふらふらとゆらめき始めた。

「……分かった……今そつちへいく」

若い女性は、キッチンの戸棚から日本酒を取り出すと口に含んで男の背中に向かって吹いた。

「ぐおおっ！！」

全身から蒸気があがり、河原でのたうち回る男。

「先生、しっかりとしてください！」

「う、うむ、どうも調子が悪いな」

男の体から蒸気があがることに、向こうの景色がより鮮明に見えるようになっていった。

「先生、やはり無理はなさらない方が」

「いや、男としてやり始めた仕事を途中でやめるわけにはいかん」

男はそう言うと、道着から短冊のような紙を取り出した。

「先生、それはなんですか？」

「うむ、我が氏神である八幡様のお札だ。くじけそうになった時はこのお札に助けてもらってきたのだ」

男はお札を両手に持って額に当てた。全身の蒸気が激しさを増していく。

「あの、先生？」

「やはり八幡様だ、こうしていると気分が」

男の姿は吹き上がる蒸気と共にかき消すように見えなくなった。

道着がふわりと河原の石を覆うように落ち、お札は支える物を失いひらひらと舞い落ちる。そこへ一陣の風がふき、お札を川の向こう

へ連れて行った。

風が通り過ぎた後には微かな花の香り。

「それではまた来週」

第3話：底へ

曇り空の隙間から差し込む光が、エプロン姿の若い女性を照らす。「皆さんこんにちは。一文字岩鉄先生のクッキングエルボー、しつこいようですが今回も野外ロケです」

カメラマンの足が微かに震えている。レンズを通してあらざるものを見た為か。

「それでは登場してもらいましょう。実は先々週から入院しっぱなしで、昨日退院したばかりの一文字岩鉄先生です」

若い女性の横には、黒い道着を着込んだ屈強な男が腕組みをして立っていた。

「うむ、皆には心配をかけた」

「退院おめでとございます。ところで先生、途中で病状が悪化したりしませんでしたか？ 具体的には先週あたり」

「む？ 医者の話によると先週が峠だったらしい。峠を越したら急激に回復して驚いたそうだ」

「分かりましたありがとうございます。それで先生、今日のメニューはなんでしょうか」

「うむ、今日は近くに川があるので、魚でいきたいと思う。ん？ このセリフ、どこかで言ったような覚えがあるな」

「気のせいです。それでは先生、よろしくお願いします」

男は首をひねりながら川へ向かって歩き出した。しっかりとした足取りには微塵の迷いもない。

男は川についても足を止める事無く、ざばざばと水の流れをかきわけていった。

「先生、何も持っていないようですが、どうやって魚を捕まえるのですか？」

「うむ、真の男の料理には道具など不要。使うのは己の肉体のみ」
男は川の中ほどで足を止めると、川面に向かって右手を構えた。

「素手で魚を捕まえるのですか？」

「うむ、普通にやっては魚に逃げられてしまつが、”意”を消す事で捕らえる事が可能になる」

「意を消すといえますか？」

「うむ、人は意識せずとも自分の意を体に表しているのだ。例えばこの場合、魚を捕まえようとする意識は、自分でも気付かないくらい肉体的変化を生み出し、魚はそれを敏感に察知して逃げてしまふという結果を生む。そうならない為には己を消し、己を川底の石と同じにしてしまえばよい。それが意を消すという事だ」

「なるほど、つまり魚を捕まえられるという事ですね？」

「うむ、そのとおりだ」

男は川面に向けて右手を構えたまま微動だにしなくなった。緊迫した空気が河原を包む。

「はっ！」

男の気合の入った声があたりに響く。川に突き入れられた右手が、水と一緒に川底の石を跳ね上げた。跳ね上げられた石は空中で美しい孤を描き、鈍い音と共に若い女性の頭部に命中した。

「むう、すこし意を残してしまつていたか……まだまだ修行が足りないようだ」

うずくまっていた若い女性は、あふれる血を手でおさえて立ち上がると、川面に向かって再び構えを取る男に近づいた。

「先生、やはり川底の石になるには、水から出ているよりは水の中の方がいいのではないのでしょうか」

「おお、なるほど、一理あるな。早速やってみよう」

男は川の深い所へ向かつて歩いていき、ざばざばと全身を沈めていった。

男の沈んだ地点からは、時折泡が浮き上がってくる。

ぽこり、ぷかりと泡二つ

流れる木の葉を泡が押す

押された木の葉は舞い踊る
ぼこり、ぷかりと泡一つ
流れる水に泡が舞う
水から旅立つ泡一つ
ぼこり、ぷかりはもういない
静かな流れ、流れる静か
川はひたすら流れゆく

「それではまた来週」

第4話：口へ

雲ひとつない快晴の空からふりそそぐ光が、白く輝く包帯を巻いたエプロン姿の若い女性を照らす。

「皆さんこんにちは。一文字岩鉄先生のクッキングエルボー、まだ野外ロケです」

カメラマンの足取りも軽い。四回目ともなれば、河原での足さばきにも慣れたようだ。

「それでは登場してもらいましょう。先週のちょっとした事故で入院していた一文字岩鉄先生です」

若い女性の横には、黒い道着を着込んだ屈強な男が腕組みをして立っていた。

「うむ、皆には心配をかけた」

「先生、退院おめでとうございます」

「うむ、そっちも何か怪我をしているようだが」

「これですか？ 常識を知らない馬鹿に石をぶつけられました」

「そうか、大変だったな」

「ええ、それはもう」

二人は顔を見合わせて笑った。

「それで先生、本日のメニューはなんでしようか」

「うむ、今回はこのうどんを使おうと思う」

男はもっていた皮袋からうどん玉を取り出した。

「魚ではないんですか？」

「うむ、懇意にしている占い師に水難の相があるので水に近づくなと言われたのでな」

「そうだったんですか。でもすぐ当たりそうな方ですね」

「うむ、我が道場設立の時にも世話になっている」

男は何かを思い出しているような遠い目をした。

「あの時も占い師に火難、水難、険難、獄難の」

「そうなんですか。それで今日はどんな料理を作るのですか？」

「今日は焼きうどんで行く」

「焼きうどんはさっぱりしていいですね。それでは先生、よろしく
お願いします」

「うむ、今まで料理できなかった分、気合を入れていこう」

男はキッチンのコンロを無視してそこに落ちている小枝をかき
集めて火をつけた。焚き火はゆらゆらとした炎を上げる。

「まずはうどんを焼く」

「火でうどんを焼きます」

男はうどん玉を一つ掴むと焚き火の上に直接のせた。白いうどん
の肌が所々黒く変色していく。

「次にうどんを皿に乗せる」

「焼きあがったうどんを皿に盛り付けます」

男は手づかみで焚き火からうどんを取り出すと、用意してあった
皿に載せた。

白と黒のコントラストも不気味な物体が、皿の上でとぐるを巻い
ている。

「よし、食べ」

「嫌です」

新・男の料理教室「ワクワク野外口ケ」終

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0111c/>

新・男の料理教室

2008年11月7日06時32分発行